

## ■ PCN だより

### PCN Volume 62, Number 2 の紹介 (その 1)

2008 年 4 月発行の PCN Vol. 62, No. 2 には Regular Article が 15 本, Short Communication が 1 本, Letter to the Editor が 7 本掲載されている。このなかから今回は外国からの Regular Article 4 本の内容を紹介する。

1. Patterns of temperament and character in a clinical sample of Korean children with attention-deficit-hyperactivity disorder

*Soo-Churl Cho, June-Won Hwang, In-Kyoon Lyoo, Hee-Jung Yoo, Boong-Nyun Kim, and Jae-Won Kim*

**韓国 ADHD 患者は新規探求性が高く自己志向性の低い者ほど症状が強い**

韓国の ADHD 患者について性格・気質と症状の関係について調査した論文である。DSM-IV の診断基準によって診断された ADHD 51 名と年齢性別を一致させた健常児 51 名に対して Junior Temperament and Character Inventory (JTCI) と DuPaul's ADHD Rating Scale (ARS-IV) とを用いて評価した。

ADHD 患者群の性格・気質は、健常者群と比較して明らかな特徴が認められた。親による評価においても患児による評価においても novelty seeking 得点が高く、self-directedness 得点が低かった。また、性格・気質と ADHD 症状の重症度との関係について検討したところ、self-directedness が低得点のものほど、ARS-IV の重症度が高かった。

この結果から、韓国における ADHD 患児には特徴的な性格・気質があり、self-directedness

が低い者ほど ADHD 症状が強くなる傾向があると報告されている。

2. Neurocognition in first-degree healthy relatives (siblings) of bipolar affective disorder patients

*Jitendra K. Trivedi, Dishanter Goel, Mohan Dhyani, Sachin Sharma, Anand P. Singh, Pramod K. Sinha, and Rajul Tandon*

**遂行機能と覚醒度は双極性障害の中間表現型となりうる**

双極性障害において、認知機能障害がひとつの中間表現型となりうることが言われているが、双極性障害患者の親族について認知機能を評価した報告は少ない。そこで、本論文では、コンピューターによる認知機能評価法を用いて、双極性障害患者の第一度親族 10 名の認知機能について評価した。双極性障害患者の第一度親族は、年齢・教育を一致させた対象群と比較して、遂行機能 (executive function) と覚醒度 (vigilance) とで低い得点を示したが、作業記憶 (working memory) は対象群と比較して障害されていなかった。この結果から、双極性障害の中間表現型として遂行機能と覚醒度が有用であると考えられる。

3. Reward pathways in Parkinson's disease: clinical and theoretical implications

*Diana M. E. Torta, and Lorys Castelli*

**パーキンソン病における報酬系**

中脳辺縁系,あるいは中脳皮質系は人の報酬行動に関与していることが知られている。そしてこの回路はパーキンソン病において障害されやすい部位であることから,パーキンソン病患者に見られる精神症状として知られる恒常性維持の困難さ,病的ギャンブル,衝動的な行動決定などを説明しうるかもしれない。このような観点から報酬系回路とパーキンソン病の障害部位とについて快楽ホメオスタシスの調節異常 (hedonistic homeostatic dysregulation; HHD) の視点に基づいて文献的に考察した論文である。パーキンソン病の運動障害についてはドパミン系の基本的神経回路構成に基づいて理解されているが,パーキンソン病患者が呈するさまざまな精神症状についても快楽追及のホメオスタシス調節異常という観点から理解できる可能性があるのかもしれない。

#### 4. Confabulation behavior and false memories in Korsakoff's syndrome: role of source memory and executive functioning

Roy P. C. Kessels, Hans E. Korftrijk, Arie J. Wester, and Gudrun M. S. Nys

##### コルサコフ症候群の作話と偽記憶について

作話はコルサコフ症候群に特徴的な症状であるが,自発性作話と誘発性作話とを区別することができる。この両者は異なるメカニズムにより起こっている可能性がある。誘発性作話は誤った記憶と関係しており,自発性作話は記憶の遂行障害,ないし,記憶内容の喪失と関係しているのではないかとの仮説を検証するために以下の検討を行った。

慢性コルサコフ症候群患者 19 名について,自

発性作話の程度を第三者による客観的な評価 (Likert 尺度) により,誘発性作話を Dalla Barba Confabulation Battery により評価した。さらに遂行機能を神経心理検査により評価し,誤記憶,記憶量については二種類の単語再生課題 (Rey Auditory Verbal Learning Test) を用いて評価した。

その結果,コルサコフ患者は記憶量の低下を示していた。そして患者はいったん学習した内容に誤った記憶を加えていた。コルサコフ患者は著明な遂行機能障害を示していたが,遂行機能障害と作話の程度,あるいは遂行機能障害と誤記憶との間には相関を認めなかった。この結果から,コルサコフ患者において自発性作話,誘発性作話と誤記憶との間に乖離があることが示唆される。

#### 文 献

- 1) Cho, S.-C., Hwang, J.-W., Lyoo, I.-K., et al.: Patterns of temperament and character in a clinical sample of Korean children with attention-deficit-hyperactivity disorder. *Psychiat Clin Neurosci*, 62; 129-134, 2008
- 2) Trivedi, J.K., Goel, D., Dhyani, M., et al.: Neurocognition in first-degree healthy relatives (siblings) of bipolar affective disorder patients. *Psychiat Clin Neurosci*, 62; 191-197, 2008
- 3) Torta, D.M.E., Castelli, L.: Reward pathways in Parkinson's disease: clinical and theoretical implications. *Psychiat Clin Neurosci*, 62; 204-214, 2008
- 4) Kessels, R.P.C., Korftrijk, H.E., Wester, A.J., et al.: Confabulation behavior and false memories in Korsakoff's syndrome: role of source memory and executive functioning. *Psychiat Clin Neurosci*, 62; 221-226, 2008

(文責: 武田雅俊 PCN 編集委員長)